

## 「浦上五番崩れ」としての原爆

篠崎美生子

「復興」という言葉がこれほど日常的に使われるようになったのは、東日本大震災からだろうか。または阪神大震災のときからだったのか。いつの間にかその起源さえ忘れてしまったほどに、なじみのある言葉になってしまった。だが「復興」とは、破壊された日常を物理的、精神的に回復するという特殊な営みであるはずだ。「復興の言説」あるいは「復興」の意味づけがはつきりしていなければ、そのための絶望的なエネルギーは湧いてこないだろう。ただしその一方で、そのようなエネルギーを生む強力な意味づけは、ノイズを排除する暴力性をもはらんでしまいがちだ。

「長崎原爆と復興の言説」というテーマに関して、私が直ちに思い浮かべることができるのは、永井隆の言説とその作用である。「永井博士」が今日まで長崎で敬愛の対象であり続けたことは、彼の言説が長崎の「復興」をいかに支えたかを示しているよう。その一方で、この言説が、あり得た別の言説を排除、抑圧してきたことも無視できない。

今回私は、永井隆の言説を批判的に取り上げることで、長崎の

「復興」にどのようなバイアスがかかったのかを再検証することにする。しかも、その言説の政治性だけでなく、あえて宗教的な意味に踏み込むことよって、これまで十分に明らかにされることのなかったこの言説の問題性を問うことを目指したい。

### 1

永井の言説は、「原爆は神の摂理」<sup>(1)</sup>であるという一言に象徴されるといつてよいだろう。『長崎の鐘』『壕舎の客』に「原子爆弾合同葬弔辞」として引用された一節を以下に引用してみる。

日本の戦力に止めを刺すべき最後の原子爆弾は元來他の某都市に予定されてあったのが、その都市の上空は雲にとざされてあったため直接照準爆撃が出来ず、突然予定を変更して予備目標たりし長崎に落すこととなったのであり、しかも投下時に雲と風のため軍需工場を狙ったのが少し北方に偏って天主堂の正面に流れ落ちたのだという話をききました。も

しもこれが事実であれば、米軍の飛行士は浦上を狙ったのではなく、神の摂理によって爆弾がこの地点にもち来たらされたものと解釈されないこともありませう。

終戦と浦上潰滅との間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪悪の償いとして、日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やさるべき潔き羔として選ばれたのではないのでしょうか？

後年「浦上燔祭説」と名づけられたこの考え方が、原爆を投下したアメリカと、遅すぎた「聖断」によって投下の道をひらいた天皇と、天皇を中心とする日本政府を同時に許す政治的な力をもつてしまったことについては、つとに指摘がある。たとえば、〈浦上燔祭説〉の名付け親である高橋真司<sup>5)</sup>は、永井の言説によって、天皇とアメリカが同時に免罪されるというをはつきり述べた上で、この言説が生き延びた被爆者が試練を堪え忍ぶべく方向づけられたと指摘している。

詩人の山田かんが七〇年代に行った永井批判も、また、痛烈なものであった。

彼は「聖者」としてカトリック信仰を文面に散りばめることで、被爆の実態を歪曲し、あたかも原爆は信仰教理をたしかめるがために落とされたというような荒唐無稽な感想を書きちらした。しかもジャーナリズムはそれらを厚顔にももてはやすという、まさにアメリカ占領軍の意を体したかのごとき活動を行いつづけたのである。(中略)

以後ながく、これら著作の持つ原爆投下への独善的カトリックエゴイズムともいえる解釈が、ひとつの強制力をもって

民衆の意識の底に降りかかるわけである。<sup>6)</sup>  
山田かんが被爆当時、聖公会信者であったということも関係してか、キリスト者永井に対する彼の失望は大きかったようだ。

しかし、山田かんは、永井の言説の「カトリックエゴイズム」を論理的に分析したわけではない。そのため、山田かんの批判に對して発された永井の支持者らの反論も感情的なものが多く、開かれた議論にはならなかったようだ。

反論のうち、比較的丁寧な永井の言説を解説した例として、片岡千鶴子のエッセイ「永井隆と『長崎の鐘』——被爆地長崎の再建——」を挙げてみよう。

カトリックの教えの根本は、イエズス・キリストは人間を救うためにこの世に來られ、十字架の苦しみによって人間の罪を贖い、復活によって永遠の生命をもたらしてくださった、ということにある。そして人間は自分の苦しみをこのキリストの苦しみに合わせることによってキリストの救いの業に参加し、キリストと共に人類の協贖者となることができる。「苦しみ」はキリストの苦しみに合わせることによって価値あるものになる、という考えがある。<sup>4)</sup>

こうした言説は、残念ながら、永井の支持者ではない論者にはなかなか届かない。それは、「カトリック信者や反共主義者には元氣の出る応援歌だろうけれど、立場の違う読者には紙屑の束」<sup>5)</sup>とした井上ひさしや、「キリスト教の天罰・天譴が天恵の意味をもつこと」<sup>6)</sup>に強い違和感を示した高橋哲哉の言葉に明らかである。

しかし、対話の成り立たないこうした状況は、先の井上ひさしの言葉にもあるように、一定の宗教的立場をとる人々にとつての

《浦上燔祭説》の価値をかえって担保する状況呼び寄せている。そうした状況を打破し、対話をふまえた上で《浦上燔祭説》の持つ意味を共有するためには、まずは《浦上燔祭説》を聖書と照らし合わせ、その整合性を問う作業が必要になってくるだろう。

拙稿「温存される《浦上燔祭説》——原爆死の意味づけと戦後天皇制をめぐる<sup>3)</sup>」は、そのような意図の下に試みられたものであった。

片岡自身も述べるように、新約聖書ではイエスが十字架にかかることであらゆる人間の罪は既に贖われたということになっているのであり、それ以上の犠牲を神が求めるのは、少なくとも新約聖書に照らした場合、理屈に合わない。殉教を尊ぶ考え方を持つキリスト者がいることも確かだが、その苦しみや死はあくまで人間がもたらす災厄であり、神が人間に死を強要するわけではない。この点で、「平和を迎える為にはたまた単に後悔するのみでなく、適当な犠牲を献げて神にお詫びをせねばならない」とする《浦上燔祭説》は、信仰上も問題をはらんでいる可能性があると言えよう。<sup>4)</sup>

私はここで、協贖への欲望自体を「聖書」的でない言説として退けたわけだが、これについてはキリスト教の立場から賛否両論の示唆をいただいた。一筋縄では解決できない信仰観の存在を実感した次第である。

しかし、百歩譲って協贖への欲望自体を許容するとしても、特権的に協贖者となることへの欲望、ある種の選良意識についてはどうだろうか。先に挙げた『長崎の鐘』でも「日本唯一の聖地浦上」と語られていたが、このように浦上を特権化する語りは、『長

崎の鐘』の他の箇所にも見いだすことができる。

知恵の木の実を盗んだアダムの子と、弟を殺したカインの血とを承け伝えた人類が、同じ神の子でありながら偶像を信じ愛の掟にそむき、互いに憎み互いに殺しあつて喜んでいた此の大罪悪を終結し、平和を迎える為にはただ単に後悔するのみでなく、適当な犠牲を献げて神にお詫びをせねばならないでしょう。これまでに終戦の機会があつたし、全滅した都市も少なくありませんでしたが、それは犠牲としてふさわしくなかつたから、神は未だこれを善しと容れ給わなかつたのでありましょう。然るに浦上が屠られた瞬間初めて神はこれを受け納め給ひ、人類の詫びをきき、忽ち天皇陛下に天啓を垂れ、終戦の聖断を下させ給うたのであります。

信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦時中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかつたわが浦上教会こそ、神の祭壇に献げらるべき唯一の潔き羔ではなかつたでしょうか。

ここでは、ほかの「全滅した都市」、ほかの死者は「犠牲性として」神に認められず、浦上だけに聖なる「犠牲」となる資格があるとの認識が語られている。また、永井が浦上をそのように見なす理由も語られている。それはつまり、浦上が「四百年」の「迫害」に耐えて信仰を守つたことである。

永井のこのような「浦上」観が、先に挙げた片岡の「永井隆と『長崎の鐘』——被爆地長崎の再建——」にも引き継がれていることには注意しなければならない。片岡はこのエッセイで、永井の『いとし子よ』<sup>5)</sup>の一節を引きながらこのよ

うにも語っている。「…世間ではよく浦上は迫害で有名だ  
と語っている。しかし、迫害があったのは浦上だけではない。  
浦上が有名なのは、よく再建したからである。復興で有名な  
のである。そなたたちの先祖はあのようにしてねばり強く、  
キリスト教社会を建てたのであった」という語りかけには、  
カトリック信徒としてのキリシタン信仰の地浦上の再建を願  
う強い思いが示されている。

「復興で有名」な浦上——つまり「復興」を繰り返してきたこ  
とに浦上キリシタンのアイデンティティを見る言説が、ここでは  
再生産されているのだ。

もちろん、「復興」を繰り返さなければならなかったことは、  
その土地が悲劇にさらされ続けてきたことの証でもある。その側  
面から浦上を語ったものとして、本島等「浦上キリシタンの受  
難——禁教令、四番崩れ、原爆——」<sup>(10)</sup>を挙げておきたい。

原爆が落ちたとき、何百年の先祖の迫害や拷問の歴史は浦  
上キリシタンにとって先祖の思い出ではあったが誇りではな  
かった。浦上キリシタンは四番崩れ以来、極貧の中に生きて、  
スパイや非国民とののしられ、一生懸命戦争のために働いて、  
そして原爆被爆。神社に参らなかつたから、外国の宗教を信  
じたから原爆は天罰だといわれ、親も、兄弟も、子供も被爆  
死、完全に心身共に打ちのめされた。

その時、永井隆は叫んだ。

——浦上は神様選ばれた民だった。みんなに代わってわ  
れわれが犠牲になったのだ。われわれが、みんなの悲しみや  
苦しみを引き受けたのだ。不正義の戦争に勝利があるだろう

か。賠償をはらって謝罪をしなければ。世界平和が再来し、  
日本の信仰の自由が許可されたのだ。神のみ摂理、神の恵み、  
神に感謝。

本島の言葉は、「復興」を繰り返さざるを得なかつた浦上にと  
つて、永井の〈浦上燔祭説〉がいかに大きなよりどころになつた  
かを如実に示しているだろう。

しかし、あえて言いたいのは、このような言説は聖書の考え方  
には必ずしもそぐわないのではないかということだ。たしかに、  
「隣人を自分のように愛しなさい」<sup>(11)</sup>というキリスト教の基本理  
念は、自己の尊重を前提としなければ成り立たない。しかし、自  
己の尊重が、自己につながる人々の死の特権的に聖別し、「世界  
大戦争という人類の罪悪の償い」という超越的な意味と価値を付  
与する形で行われた場合、その言説は、「仙台空襲で焼死したA  
君の両親や妹」を「犬死」<sup>(12)</sup>として抑圧する結果を生んでしまう。  
それはとくに、イスラエルの神をあらゆる人間の神として再解釈  
した新約聖書とは、全く異なる方向を向いているとさえ言えるの  
だ。

## 2

かりに諸説百般の聖書解釈は措くとしても、永井たちの言説に  
はある大きな誤謬が潜んでいる可能性がある。永井、片岡、本島  
の三者の語りに共通しているのは、長崎の原爆を浦上キリシタン  
迫害の歴史の先に位置づける枠組みである。この枠組みを仮に「浦  
上五番崩れ」言説と呼び、その根拠を検証してみることにしよう。

ちなみに「崩れ」とは、禁教下でキリシタンであることが露見し、迫害を受けることを言う。「浦上五番崩れ」とは、江戸時代から明治のはじめまでに浦上に四回の崩れがあったことを踏まえ、原爆を五番目の「崩れ」、即ち一種の殉教とみなした呼び名だと言つてよいだろう。管見によれば、その最も早い用例は永見津平の『長崎五番崩れ』<sup>(13)</sup>という小説で、信仰と迫害の連続性を前提とした構成になつている。また「浦上五番崩れ」という言い方を使わないにしても、こうして信仰、潜伏や、迫害の苦勞の延長線上に原爆を見る見方は、広く原爆文学研究者にも共有されている傾向があるようだ。<sup>(14)</sup>

しかし、近年出版された、いわゆる「隠れキリシタン」に関する研究は、キリシタンや「崩れ」を典型とする弾圧のイメージを大きく変えつつある。二〇一四年に出版された二冊の著作を参照してみたい。

まずは、宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像——日本人の基督教理解と受容——』<sup>(15)</sup>である。宮崎はまず、「カクレキリシタンは隠れているでもなければ、キリスト教徒でもなく、キリスト教的雰囲気を感じ出す衣をまとつた典型的な日本の民俗宗教の一つ」であつたと言ひ切る。その例証として、「カクレキリシタン」の信仰が「現世利益を求める呪術的」なものであつたこと、彼らが「仏像、仏壇、位牌、数珠、御札、お守りなどを捨てて受洗したとたん「宣教師に対して、それらにとつて代わるキリシタンの奇跡を起こす呪術的な信仰対象を求め」たことなどを挙げている。もし、宮崎が言うように、「カクレキリシタン」が「仏様」と「神様」と「カクレの神様」の三位一体の神を拝んでい

た人々だとすれば、寺社詣ではカムフラージュではなく、日常の信仰生活の一端ということになるはずである。宮崎はまた、浦上の信仰が強固であつたことについても、中村博武の論<sup>(16)</sup>を用いつつ、「信仰共同体から仲間外れにされることへの恐れ」がその主因ではないかと述べている。

また、大橋幸泰『潜伏キリシタン——江戸時代の禁教政策と民衆——』<sup>(17)</sup>には、「潜伏キリシタン」は「少なくとも表面的には模範的な百姓であつた」とある。

先に見た浦上一番崩れに関わつて、大村藩から長崎奉行所へ伝えられた報告のなかで、「異宗」を疑われた者は檀那寺の宗教活動も神事・仏事も怠らず、領主への年貢・公役も怠りなく収めていると指摘されていることや、天草崩れに先立つて島原藩から幕府への伺書に、「異宗」信仰の疑いがある者達は村方の害になるようなことはなく、毎日整然と家業に励んでいるとされたことに、それは端的に示されている。だからこそ、幕府権力は、余計な穿鑿をして無理矢理「一切支丹」を摘発するよりも、そのまま放つておいたほうが秩序維持には有効だと考えたのであろう。

文中にある「浦上一番崩れ」（二七九〇）「天草崩れ」（二八〇五）ともに、最終的には全員が釈放され、ひとりも処刑されてはいない。「二番崩れ」（二八四二）も同様である。「三番崩れ」（二八五六）では、たしかに十数名が獄死して浦上の組織に影響を与えたと言われるが、村民が残らず捜索を受けて流罪に処せられるというような大規模なものは、「浦上四番崩れ」（二八六七）以外にはない。このようなデータと、宮崎、大橋の新たな「カクレキリシ

タン」観を合わせみるならば、「浦上」を「四百年」「迫害」され続けた「聖地」と見なすのはフィクションではないのかという疑いが浮上してくるだろう。

「一番崩れ」から「三番崩れ」と、「四番崩れ」との間の差異はほかにもある。捕縛された者たちが無罪を主張した「一番崩れ」から「三番崩れ」に対して、「四番崩れ」の被害者たちが自らを「キリシタン」だと名乗っていた点である。そもそも「四番崩れ」は、それより二年さかのぼる一八五七年、できたばかりの大浦天主堂においてプチジャン神父と浦上キリシタンの出会い（いわゆる「信徒発見」）があり、これに勇気を得た信徒が、キリスト教式の葬式を行うべく口上書を提出したことが原因になったというのが一般的な説である。

ただし、「四番崩れ」当時の浦上キリシタンと、「一番崩れ」から「三番崩れ」のキリシタンとの間にどの程度明確な断絶を見るべきなのか、あるいは「四番崩れ」当時の浦上キリシタンと西洋カトリックとの間にどの程度の連続性を見るべきなのかどうかについては、慎重な検討が必要であろう。

この問題については、宮崎、大橋らの研究成果のほかにも、カクレと西洋カトリックとのズレに被爆者の苦悩を重ねた井上光晴「手の家」<sup>(8)</sup>などの小説もある。永井の妻の実家も、「帳方」というカクレ特有の役職を務め続けてきた家であった。

むろん私は、西洋カトリックとの連続性があるから正しいとか、価値があるというつもりはないし、逆もまたしかりである。だが、「四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し」たがために、特権的に神に認められるはずだという言説がフィクションであるこ

とだけは、明らかにしておきたいと思う。それは、その言説が、宗教の名を借りて人間の命に格差を設け、人を（疎外）する力を持ってしまうからである。

### 3

「四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し」た「浦上」像——まさに伝統の創造によってつくられた像だが、このような言説はいったいどのようなようにしてつくりあげられたのだろうか。

立て役者として挙げられるのは浦川和三郎という神父である。多くの著書をもっているが、中でも最も有名なのは、日本のキリシタンの迫害史を書いた『日本公教会の復活』<sup>(9)</sup>だろう。

浦川はこの後、何冊も同じような迫害史を書いていくが、興味深いのは、時代が下るにつれて浦上キリシタンの姿がより立派に脚色されていくことだ。一例として、寛永年間に処刑され、いわゆる「ペアトス様の墓」に埋葬されているとされるジワンノ、ジワンナ、ミゲルの一家の最期についての記述を比較してみよう。

まず『日本公教会の復活（前編）』（一九一五）には、以下のようにある。

前にも記せる如く、浦上山里村は長崎市に隣接せる地とて、幕府の直轄に属し、元龜天皇の頃には住民挙つて公教を信奉して居たのであるが、幕府の峯を吹き下した迫害の嵐は日に日に猛烈くなり、有力な信者は大抵殺し尽され、さしも盛大を極めし浦上教会も、今や荒に荒て、見る影もなき憐な姿に成り果てた。其間には水責め火責めの苦を凌ぎ了へて、天晴

の殉教者となつた人も尠からずあつたに相違ないけれども、今日まで名の伝はつて居るのは、唯だジワンノ、ジワンナ、ミギルの親子三人である。三人とも熱心な信者であつたが、一日息子のミギルが草刈に出た後に役人が突然やつて来て、ジワンノ夫婦を搦め取り、ミギルが野から帰るのを埃ちつけて之も亦た難なく引捕へ、三人が幾ら欺しても賺しても棄教を肯んぜざると見るや、到頭之に火刑を宣告した。

これが、一九二七年の『切支丹の復活 前編』<sup>(20)</sup>になると、語りが小説のように脚色されるとともに、捕らえにきた役人を夫婦がもてなす次第など、『日本公教会の復活』にはなかつたエピソードが加筆されるのである。

記録に残つて居る浦上キリシタンの殉教談はたゞ是だけに上るが、なお口碑としては、ジワンノ、ジワンナ、ミギル親子三人の事蹟も伝つて居る。(中略)

『お役人様、倅が唯今草刈りに行つて居ます。間もなく帰宅するでせうから、夫までの所をちよいとお待ち下されませ。』と、ジワンノは暫くの猶予を請ひ、妻に命じて、新米の飯を炊かせて之を役人に饒へ、自作の革桂をも呈上した。

彼此する中にミギルも野から歸つて何の抵抗もせず縛に就き、其場で水責に扱せられた。

「敵を愛する」立派なキリシタンとしてのジワンノ、ジワンナ、ミギルの造形は、一九四三年の『浦上切支丹史』<sup>(21)</sup>にも継承される。この書物は、こうした浦上の顕彰に加えて、「皇国」への賛辞が述べられているところに特徴があると言えよう。

是まで我国の教会は一般布教地と同様に取扱はれ、司教は

単に「代牧—Vicarius Apostolicus」——と云ふ名義を有するに過ぎなかつた。然し今や憲法は発布され、信徒の公許は保証され、政府当局も基督教の発展を阻む何等の氣遣ひもなしと見られた教父レオ十三世は、明治二十四年(一八九二)六月十五日付を以て日本教会に正規の階級制度を確立し、東京大教区を設け、其下に長崎、大阪、函館等の教区を従属せしめられた。支那や朝鮮や、印度支部やには、信徒数の上から云ふと、われに数倍、否、数十倍せる教区すら少くはないにも拘らず、今なほ代牧教区を以て満足しなければならぬのに、日本教会ばかりが、早くから斯うした特典をから得たのは、決して我等日本カトリックの実力を認められた為ではなく、むしろ日本帝国の実力に信頼を置かれた結果であつて、謂はば我等は維新後に於ける日本の地位の國際的躍進に陪乗した訳である。カトリック信徒たる我等はこの際皇国への感謝を新にいよいよ尽忠報国の誠を致し、臣道実践に邁進しなければならぬ。

一五世紀末からの「弾圧」を解いて信教の自由を与えてくれた上、国力充足によつてローマ教会の高評価をも引き出してくれた「皇国」への感謝——これによつて、前近代の「弾圧」の過酷さは、単に浦上キリシタンのアイデンティティを強化する「物語」としてではなく、近代の天皇の偉大さを証明する「物語」としても働くことになるのだ。

一九四三年と言へば、キリスト教会も仏教界も、神社参拝や戦争協力を求められ、本来の信仰との両立に苦慮していたはずの時期だが、浦川にとつて、協会にとつて、はたしてそれがどれほど

の「苦慮」であつたのかは、改めて個別具体的に検証すべきところだろう。

さて、このようにして、迫害を受け続けてきた「浦上」を近代以降の天皇の恩恵と抱き合わせに語り続けてきた浦川和三郎は、永井が先に挙げた「弔辞」を読んだ一九四五年一月の「合同慰霊祭」に出席し、追悼説教を行ったという。小西哲郎<sup>(2)</sup>によれば、このときの永井の弔辞の草稿の末尾には、『長崎の鐘』にはない以下のような文言があるとのことである。

本日ハ 長崎教区主催ニテ アナタガタノタメニ、此ノ浦上 天主堂ノ廃墟ニ於テ 合同慰霊祭ガ営マレ 仙台浦川司教様 ノ歌ミサト赦祷式トガアゲラレマシタ。浦上出身ノ司教様、神父様、童貞様ガ日本中カラ帰り来ラレ 八千本ノ十字架ヲ カカゲル二千名ノ遺族ト共ニ心シミジミ祈リヲササゲテヤマス。

ここからは、「浦上出身ノ司教様、神父様、童貞様」の中でも、浦川が特別の賓客であつたことがうかがえよう。

そもそも浦上和三郎とは、長崎出身のカトリック司教で母が「四番崩れ」の経験者であるという人物だ。大浦天主堂司教、長崎公教神学校長などを経て、一九四一年に仙台教区長となり、翌年からは那人初の司教を務めていた。このように、浦上、長崎に強い思入れがあり、またカトリック教会における地位の高い人物によつてつくられた〈浦上迫害史〉と、それを中心とした日本の切支丹史は、誰かに相対化されるということが全くないまま、片岡弥吉、姉崎正次ら<sup>(3)</sup>に受け継がれていったようである。さらには、長崎と縁の深い浦川及び片岡の言説は、浦上の人々にとつてとり

わけ重い意味を持つたに違いない。

#### 4

さてこうして「浦上」言説をふりかえってみると、永井の〈浦上燔祭説〉が、浦川和三郎の〈浦上迫害史〉と同じ枠組みの上に成り立っていることが見えてくるのではあるまいか。

浦川の言説においては、「四番崩れ」が最後の迫害で、それによつて信仰の自由が獲得されたということになっている。一方、永井の〈浦上燔祭説〉では、原爆が最後の迫害で、それによつて世界に平和が訪れて、信仰の自由が得られたと語られている。浦川の〈浦上迫害史〉に従うなら、天皇の威光によつて「迫害」は三百年余で終わったことになるはずだが、永井の言説においては「迫害」は「四百年」でなければならぬ。大きな犠牲（崩れ）によつて初めて信仰の自由と平和がもたらされたという「物語」の枠組みを活かすことが、ここでは最優先されているのである。あるいは、人の死や犠牲を意味づけ、権威化したいという欲望に答えるために、この操作が不可欠だったと言ふべきかもしれない。

先ほど、浦川の言説を再生産した人物として片岡弥吉の名を挙げたが、永井の〈浦上燔祭説〉を継承し、広めていったのもまた、戦前からの知人でもあつたこの片岡だと言ふそうだ。

片岡の『永井隆の生涯』<sup>(4)</sup>によれば、受洗・結婚から間もない一九三四年の永井は、夫人のついで長崎聖ヴィンセンシオ会に加わつたということだが、この会は、純心女学園の母体でもある純心聖母修道会とも関連が深かった。そして、戦前から純心女学校



で教鞭を執り、一九五〇年からは純心女子短期大学の教師となり、のちに副学長も務めたのが片岡であったのである。永井はまさに片岡とともに長崎のカトリック組織の中心におり、そのネットワークの中で、(浦上燔祭説)も拡散されたと言うべきだろう。

なお、長崎純心中学校・純心女子高等学校の公式HP<sup>(25)</sup>には、永井と学園との関連が以下のように紹介されている。

永井隆博士は、純心学園の初代校長(後の学園長)江角ヤス先生と、同じ島根県の出身のカトリック信者であることもあって、深い信頼関係で結ばれ、永井博士ご自身も純心学園には創立当初からさまざまな面で関わって下さいました。その関わりのいくつかを紹介したいと思います。

永井博士の妻であり、筒井茅乃さんのお母様である永井緑さんは1939年から1942年まで、純心学園の家庭科教員として勤めておられました。また永井博士ご自身も、戦前の一時期、「教練」の教員として長崎大医学部勤務の傍ら、来られていました。

永井隆博士の二女である筒井茅乃さんは、純心中学校・純心女子高等学校の10回生です。

(中略)

一九四八年には、現在でも八月九日には校内の「慈悲の聖母像」の前で歌われる「燔祭の歌」(永井隆作詞・木野普見雄作曲)が完成します。この詞に関しては永井博士ご自身が「天主をたたえる歌をうたいつつ、炎より熱い信仰に燃えて、天に昇りゆく純潔の子よ。召された汚れなき子羊よ。私がそれを想っていたら、ひとりでに口をついて出た歌がこれです」

た。……自分で作った歌に自分で泣いたのは、これが初めてです」と述べられています。

信仰と迫害の歴史を相互に確認しあいながら、その最後に「浦上五番崩れ」としての原爆を位置づける仕事は、永井だけではなく、いわば組織的に行われた状況が、ここからはくみ取れよう。それは永井の没後も続き、片岡弥吉から片岡千鶴子や本山等へ、あるいは今西祐行の童話『浦上の旅人たち』<sup>(26)</sup>などへも受け継がれていったのではあるまいか。

しかし、「浦上五番崩れ」によって信仰の自由が得られたという言説はどこまで正しいのかを、あるいは、この言説を発信することがどのような意味を持つのかを、改めて考える必要があるだろう。この考え方が正しいとすれば、「四番崩れ」で信仰の自由を得たとする浦川の言説は相対化されねばなるまいし、近代以降もキリスト教信仰を抑圧し続けた天皇(を主権者とする戦前の日本政府)は批判されねばならず、それを見破ることが出来ずに日本の教区に権威を与えたローマ教皇も批判の対象となろう。また、一九四三年段階で天皇を賛美した浦川の言葉も、カムフラージュというには過剰な欺瞞であったということになる。

しかし、永井は、こうした矛盾に対峙することはなかった。既に多くの批判があるように、「神の摂理に従って原爆を投下したアメリカと、聖断によって終戦を決意した天皇との両方に寄り添う道を選んだわけである。戦後、病床にある永井を、ヒロヒトやヘレン・ケラー、及び枢機卿が見舞ったという出来事は、永井が「神」の名を用いることで、両立し得ないはずのそれらの権威すべてに寄り添ったことを意味しているだろう。

「神」の名において権威に寄り添い、「キリシタン」の地位を浮上させようとする永井の語りの中で、「キリシタン」と「放射線(科)」がダブルイメージでとらえられているのは、極めて興味深いことである。耳の病気のために内科や外科を専攻することができず、放射線科の医師になったという永井は、医局における放射線科の扱いがいかに粗末であったかを、繰り返し語っている。

隆吉の医局生活は、教室の独立を目的として始まった。目の達成までに十年かかるか、十五年かかるか、それは一にかかって我が努力にある。物理的療法科が内科や外科と肩を並べる公認科となり、主任が教授に昇格し、講座を設け、講義も正課となり、直接患者を受け付け、入院ベッドを置き、研究室を完備し、我々が病院の廊下を一人前の肩幅で歩けるように、きつとしてみせる。<sup>(27)</sup>

このように「放射線科」の敗者復活を切望する立場からすれば、原爆の破壊力が全世界に知れ渡った事態は、一面で喜ばしいことになるのかもしれない。トリニティサイトにおける初原爆実験を語る永井の語り口は、実に軽やかだ。

こうして原子学は、ついに実験室を出て、工業化されることになった。秘密は全く守られた。関係者以外は、アメリカ人といえども知らずにいた。それから満五年たった。一九四五年七月一六日午前五時三〇分、ニューメキシコの砂漠に一瞬ひらめいた大いなる光、あらゆる物を吹き飛ばした力、音というべくあまりに大きい音、すべてこれまでの形容詞では表されぬ大きな爆発が起こった。これこそ科学の勝利を祝う原子の叫びであった。

超えて八月六日広島に、続いて八月九日ナガサキに同じ力は解教されて、原子の中に秘められ蓄えられてある神秘の深さを人類に教えた。<sup>(28)</sup>

社会の中で真価を認められず、長い間「迫害」されてきた「キリシタン」と「放射線」——その結節点に「永井隆」という記号は存在する。永井の言説には、イエスへの協贖の欲望というより、特権的に協贖者であろうとする選良意識があると初めに述べたが、むしろ永井は、まるでその言説の中で、両者を桎梏から解放する現代のイエスとしての自己像を提示しているかのようである。

永井の言葉は永年被爆者を、とくにカトリックの信仰を持つ被爆者を励まし続けたことではあろう。しかし一方で、こうした言葉が、被爆したカトリック信徒に愚痴の一つも言わせない抑圧をもたらす働きを持つてしまった側面もあるにちがいない。また、高橋眞司<sup>(29)</sup>も述べるように、カトリックではない被爆者の、とくに福田須磨子の「何も彼も いやになりました。」<sup>(30)</sup>のような言葉を封じることができたかもしれない。カトリックと非カトリックの間の溝を深めてしまったと言ってもいいだろう。

初めに述べたように、「復興」へのエネルギーは、しばしばノイズを排除する形で作られる。永井の言葉が多くくの被爆者を励ましたことはたしかだとしても、たとえばこの言説が、人が持ち続けるべき「放射能」への警戒心をいかに解いてしまったか、永井を敬愛するという山下俊一氏<sup>(31)</sup>の福島における発言の数々が如実に示しているような気がしてならないのだ。

## 注

- 1 永井隆『長崎の鐘』（日比谷出版、一九四九・四）中「壕舎の客」に収められた「原爆合同葬弔辞」
- 2 高橋眞司『長崎にあつて哲学する——核時代の死と生——』（北樹出版、一九九四・七）
- 3 山田かん『偽善者・永井隆への告発』（『潮』一九七二・七）
- 4 片岡千鶴子「永井隆と『長崎の鐘』——被爆地長崎の再建——」（長崎純心大学博物館磯村平和文庫編『被爆地長崎の再建』長崎純心大学博物館、一九九六・三）
- 5 井上ひさし『ベストセララーの戦後史』永井隆「この子を残して」昭和二十四年」（『文藝春秋』一九八七・六）
- 6 高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖繩』（集英社、二〇一一・一）
- 7 拙稿「温存される〈浦上燔祭説〉——原爆死の意味づけと戦後天皇制をめぐる」（『社会文学』二〇一三・七）
- 8 『長崎の鐘』『壕舎の客』（注1に同じ）
- 9 永井隆『いとし子よ』（講談社、一九四九・九）
- 10 本島等「浦上キリシタンの受難——禁教令、四番崩れ、原爆——」（『聖母の騎士』二〇〇〇・一〇）
- 11 『新約聖書』『マタイによる福音書』一九章一九節
- 12 井上ひさし。注5に同じ。
- 13 永見津平『長崎五番崩れ』（合同出版、一九七五・七）
- 14 横手一彦「被爆後を生きる——長崎浦上・死の谷の記録など——」（『社会文学』二〇一三・七）には、「一五六七年頃にキリスト教が伝えられ、近世に国禁の信仰とされた後も、浦上数千の信徒は、教えを密かに受け継いだ（長崎県内数万人潜伏）。（中略）つつましく生きる、その信仰の地に、二度目の原子爆弾が投下された。」とある。
- 15 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像——日本人の基督教理解と受容——』（吉川弘文館、二〇一四・二）
- 16 中村博武『宣教と受容 明治期キリスト教の基礎的研究』（思文閣、二〇〇〇・三）
- 17 大橋幸泰『潜伏キリシタン——江戸時代の禁教制作と民衆——』（講談社、二〇一四・五）
- 18 井上光晴「手の家」（『文学界』一九六〇・六）
- 19 浦川和三郎『日本公教会の復活（前編）』（天主堂、一九一五・一）。浦上四番崩れの直前、大浦天主堂のプチジャン神父に、浦上の信者が名乗り出た出来事（Ⅱ「復活」）までが語られている。後編に四番崩れの記載があるはずだが、書物自体が現存しない。なお、この本は、芥川龍之介「おぎん」の典拠ともなっている。
- 20 浦川和三郎『切支丹の復活 前篇』（帝国書院、一九二七、一一）
- 21 浦川和三郎『浦上切支丹史』（全国書房、一九四三・九）
- 22 小西哲郎「永井隆の「原子爆弾死者合同葬弔辞」手稿」（『長崎外大論叢』二〇一四・一一）
- 23 たとえば、片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』（時事通信社、一九七九・一二）や、姉崎正次『キリシタン宗門の迫害と潜伏』（同文館、一九二五・二）などが、浦川の次世代の書き手によるキリシタン史だと言えようが、どちらも浦川の名を挙げ、その説をなぞって「殉教」を強いられた迫害の歴史を語っている。また、浦川の『浦上切支丹史』（注21参照）の「跋」は、片岡弥吉によって書かれて

いる。

- 24 片岡弥吉『永井隆の生涯』（中央公論社、一九五二、四）
- 25 純心中学校・純心女子高等学校公式HP「純心学園と永井隆博士」  
[http://www.r-junshin.ed.jp/modules/gakow/index.php?content\\_id=9](http://www.r-junshin.ed.jp/modules/gakow/index.php?content_id=9)（二〇一五・一〇・二五アクセス）
- 26 今西祐行『浦上の旅人たち』（実業之日本社、一九六九、六）。「あとかぎ」で今西は、浦上の『浦上切支丹史』（注21参照）を参照してこれを書いたと述べている。
- 27 永井隆『滅びぬものを』（一九四八・一）
- 28 永井隆『生命の河』（一九四八・八）
- 29 高橋眞司。注2に同じ。
- 30 福田須磨子「ひとりごと」（『朝日新聞』一九五五・八・一一）
- 31 「長崎大学広報誌 Choho」（二〇一一・七）「総力特集…東日本大震災で長崎大学が果たした役割」に掲載されたインタビューにおいて、山下俊一氏は、「ドブさらい」を「不安」がる「お母さん」たちを元気づけるために、「男は大丈夫なんだから、男にさせなさい！」と呼びかけたエピソードを語り、自分は批判を受けても「険しい方を選ぶ」と述べている。そしてその理由として「永井隆博士はずっとそうだったからです。彼も自分が苦勞する方を取った。常に死と向き合っていた彼は死に向かって努力をし、苦勞する方が天国への貯金になると思っていた。僕もクリスチャン、迫害を受けてきた浦上の子孫ですよ。だから人生観の中にそれがあるんでしょうね。」と語っている。こうした語りにも、選良意識が現れていると感じるのは私だけだろうか。